異世界でゆるゆる生活を満喫す

Hazuki Yuna
著 葉月ゆな
絵 ガラスノ

アルフレット
ハルトの父。
ウエストランド家の当主。
ヴィオレッタ
ハルトの母。
ウエストランド家の
実権を握っている。
クリス
ウエストランド家の長男。
常に冷静なしっかり者。
ジェラ
ウエストランド家の次男。
家族のムードメーカー。
リプカ
ジェラの従魔。
ビアンカ
クリスの従魔。
ハルト
ウエストランド家の三男。
理想のゆるゆる生活を
満喫するため、
前世の知識を生かして
魔導具を開発していく。
アトレ
ハルトの従魔。
超希少な
フェンリルの子供。
登場人物紹介

第1話　転生後の僕の状況

「ハルト様、朝ですよ。起きてください」
僕――ハルトは侍従の少年、ジョルジュに布団を剥がされる。
「春先と言っても、まだ寒い朝に布団を取るなんてひどいじゃないか」
僕は眠たげな声で抗議をした。そして体を横向きにして丸くなる。
「何を言っているのですか。優しく起こしても起きないのは誰です？　毎日同じセリフを言ってないで、さっさと起きてください」
ジョルジュは剥いだ布団を持った状態で、きつい口調で言い返す。
僕は睡眠を諦めて、しぶしぶ起き上がり身支度を始めた。

◇　◇　◇

僕の名前はリーンハルト・ウエストランド。辺境伯家の三男坊で、7歳だ。
4か月前の流行り風邪で高熱を出し、3日間生死の境をさまよった際に、日本人だった過去を思い出した。

思い出したといっても、全部の記憶が戻ったわけではない。
ブラック企業に勤めていて過労死した記憶はあるのだが、日本人だった時の名前や家族などは思い出せないといったように、僕個人に関する記憶は曖昧なのだ。
ただ日本で受けた教育、料理、健康などに関する知識はあるし、電車や車、携帯などが日常生活に必要だったことは、はっきりと覚えている。
これがどういう意味を持っているのかはわからないが、この人生のどこかで役に立つといいなと思う。
今僕が住んでいるのは、アランフェス王国という、大陸の中でも3番目に大きな国だ。
2つの公爵家、5つの侯爵家、侯爵家と同等の地位にいて、東西南北それぞれを治める4つの辺境伯家。この11の貴族家が国の中で大きな力を持っている。
我が家、ウエストランド家は西の辺境伯だ。隣国との間にある広大な樹海の魔獣討伐と、この国最大のダンジョンでドロップされる鉱物資源の管理をしている。
樹海の魔獣は、この国の他の地域に生息する魔獣よりも強く、奥に進めば進むほど危険度が上がると言われている。
その魔獣の牙、骨、皮は武器になり、また皮は生活雑貨としても活用される。
魔獣の肉は食料や肥料になり、内臓の一部は薬やポーションの材料になる。
そして魔獣から採れる魔石は、魔導具を動かす原動力となるため、人々の生活に欠かせない大変

重要な資源である。
それに加えて、ダンジョンの鉱物資源を利用した武器の製造、貴金属加工も盛んだ。
他の辺境伯についても触れておこう。
北のノーストレイド家は、商業都市として栄えている。大陸一番の大国と接しており、大国とその周辺国との貿易が盛んに行われているからだ。
また、毛織物や絹織物も有名だ。
東のイーストスプリング家の領地にはダンジョンが2つある。
また、薬草の栽培が盛んで、ポーションの産地として有名だ。山地が多いため果物栽培もしており、果実酒も非常に有名である。
南のサウスコート家は、この国で唯一海に面しているため、海賊の取り締まりを行っている。漁業と海上貿易が盛んで、それに加えて綿花栽培と綿織物、砂糖製造も行っている。
というように、辺境伯家それぞれに異なる特徴がある。
4つの辺境伯の均衡が保たれている時は、国が安定して平和と言われている。
そして、最も大切なことだが、この異世界には火、水、風、土、氷、雷、回復、付与の8つの魔法が存在する。
8歳になった1か月後に、使用できる魔法の属性を調べる魔力鑑定の儀式を教会で受けることができ、どんな人間も必ず1つは魔法を使えるようになる。

貴族は魔力量が平民より多いため、２つ以上の属性を使える者がほとんどだ。
貨幣に関しては、白金貨、金貨、銀貨、銅貨、鉄貨の５種類が存在している。
その価値を日本円に換算すると、白金貨は１００万円、金貨は10万円、銀貨は１万円、銅貨は１０００円、鉄貨は１００円だ。

◇　◇　◇

僕が、ぼーっと鏡の前に座っている間に、ジョルジュが僕の身支度を整えてくれた。
ちなみにジョルジュは僕より年上で、11歳だ。
そのまま僕は食堂に向かう。僕が食堂に入った時には、すでに家族全員が揃っていた。
家族に挨拶をして席に着くと、使用人によって、ふわふわのオムレツ、ミネストローネ、新鮮な野菜のサラダ、パンの盛り合わせが運ばれてくる。
「皆揃ったようだから朝食にしよう」
父であるアルフレットの言葉で、家族が朝食を食べ始めた。

ここで僕の家族の紹介をしよう。
父様の名前はアルフレット。
筋肉ムキムキというほどではないが、樹海やダンジョンでの魔獣討伐が主な仕事の我が家――ウエストランド家の主らしく、がっしりとした体つきだ。
デスクワークよりも体を動かす方が好きな、30代後半のイケメンである。
黒髪にグリーンの瞳をしている、氷と風魔法の使い手だ。
母様の名前はヴィオレッタ。ちなみに父様はヴィヴィと呼んでいる。北の辺境伯家、ノーストレイド家から嫁いできた、金髪で菫色の瞳をした女性だ。
現在30代半ばだが、見た目は20代半ばにしか見えないほど若々しい美女である。
商売が活発なノーストレイド家出身なだけあって、魔獣の素材、ダンジョンの鉱石、武器、貴金属などの販売の管理をしている。
父様の手伝いとは言っているが、実質的には采配を振るっているやり手である。
使用する魔法は水と回復魔法だ。
２人の馴れ初めは、実家の仕事でウエストランドに来ていた母様に惚れた父様が、猛アプローチしたことらしい。
母様も自分の才を存分に発揮できそうなウエストランドと、イケメンな父様にまんざらでもなく、結婚に至ったと聞いている。
母様が馴れ初めの話をすると、いつも父様は否定も肯定もせずに黙っている。
でも恋愛結婚は事実のようで、家族仲はとてもいい。

「クリス、学園の入学準備は順調か」
父様が朝食を食べながら、クリス兄様に質問した。
「必要なものは王都の屋敷に送ったので大丈夫です。もし何かあれば向こうで揃えたいので余裕をもって王都に行こうと思います」
クリスと呼ばれているのは、長男のクリスフォード。
金髪にグリーンの瞳をしていて、顔は父親似だ。文武両道で弟たちにも優しく、物語の王子様のようなイケメンだ。そして、氷と風の魔法を操る。
クリス兄様は現在15歳で、王都の学園に入学するため、10日後に王都にある我が家の別邸に移る。
貴族は、15歳から18歳の3年間、学園に通う義務がある。とはいえ、貴族であれば誰でも通えるわけではない。
勉強の基礎部分は各家で学び、入学試験に合格した者のみが学園に入学できるのだ。
不合格者は成人後、自動的に平民になってしまう。これは、嫡男だろうが関係ない。
不合格者を出すことは各家の不名誉となるため、子供の教育に各貴族家は力を入れている。
入学後には、共通学科、領地経営科、騎士科、官僚科、魔法科、薬剤科、錬金術科の中から1つを選び、専門学科とするのだ。
学園は前世で言う大学みたいなところであり、貴族の交流の場としての役割もある。
学園のある王都へは、鉄道を利用して行くことになる。馬車だと我が家から王都まで10日かかるが、鉄道を利用すれば1日で着く。
王都を中心として、東西南北の辺境伯の領地までそれぞれ鉄道が敷かれているため、遠出になると鉄道移動がほとんどだ。

「俺は2年後かー。学園の騎士科に早く通いたいな」
そう話すのは次男のジェラルド。家族からはジェラと呼ばれている。
黒髪に菫色の瞳をしていて、顔は母親似の美男子である。性格は明るく、おおらかだ。
騎士科を目指しているだけあって戦闘能力が高いが、筋肉ムキムキではなく、スラッとしている。
その見た目に騙されて絡んできた者は、あっという間に倒されてしまう。
そんな容姿と中身のギャップに、初めて会った人は驚くだろう。
人懐っこさから、いつも輪の中心にいるタイプで、長男とは違った魅力を持っている。
ちなみに火魔法と風魔法の使い手でもある。
そして、家族からはハルトと呼ばれている三男の僕は、銀髪に菫色の瞳をしていて、顔は母親似である。
銀髪は祖父と同じだ。そのお祖父様は父に家督を譲ってはいるが、いつも元気に樹海やダンジョンで魔獣狩りを行っている。魔法に長けているのだ。
現在はお祖母様と一緒に、この大陸一番の大国であるソレイユ帝国を旅行しているため不在だ。

この世界で、銀髪の者は魔力量が多いと言われている。魔力の鑑定は8歳にならないと受けられないため今のところわからないが、僕も自分の実力には期待している。
魔法が使える世界にいるのだから、魔法をたくさん使ってみたいのだ。
ただ前世のような過労死は避けたいので、仕事はほどほどに、好きなことをしながらこの世界を楽しんでいきたい。
この方針はすごく大事なのである!!
僕は、午前に礼儀作法や国の歴史、算術などの座学をし、午後は体力づくりと、週に3日の乗馬をする。それが終わると、夕食まで自由時間だ。
魔力鑑定後は、剣術と魔法の実技が追加され、自由時間が減ってしまうらしい。
平和で比較的安全な領地とはいえ、日本みたいに外で遊ぶことはできない。誘拐されたり、魔獣に襲われたりすることもあるからだ。
だから、娯楽といえば本を読むか、ボードゲームをするかぐらいになる。
ちなみに本は手書きのため、非常に高価で裕福でないと買えない。

◇　◇　◇

本日の予定をすべてこなした僕は、読みかけの冒険小説を持って庭にある温室に行く。
温室は温度が一定で過ごしやすく、色々な花が植えられている。寝そべることができるソファーと丸テーブルも置いているが、これは僕が持ち込んだものだ。
さらに家族が来た際にお茶をするための、テーブルと椅子も置いてある。僕がここに入り浸っているせいで、時々家族が休憩を兼ねて僕に会いに来るからだ。
植物に囲まれた空間は居心地がいい。
僕はソファーの端にクッションを置き、クッションに上半身をもたせかけ、足を伸ばした状態で本を読んでいた。
「やっぱりここにいたか。ハルトはこの温室が本当に好きだな」
ジェラ兄様の声が聞こえ、僕は声のする方を振り向いた。
そこには、クリス兄様も一緒にいた。
「2人揃ってどうしたのですか？」
僕の問いにクリス兄様が答えてくれる。
「あと10日ほどで私が王都に行くから、その前に兄弟3人で樹海に行かないか？　父上には許可をもらった。学園に通っている間は、夏しかここに帰ってこられないからね」
クリス兄様の言葉を、ジェラ兄様が補足する。
「樹海といっても浅い位置だし、もちろん護衛もつく。ただし勝手な行動をハルトがしないっていうのが条件になるがな」
「ほんとについていっていいんですか？　みんなの言うことちゃんと聞きます。クリス兄様、ジェ

ラ兄様、ありがとうございます」
僕はソファーから飛び起きて2人に抱きついた。
そうして僕は初めて樹海に行くことになった。

第2話　初めての樹海

翌日の朝、邸宅の前に僕たち3兄弟とそれぞれの侍従1人ずつ。そして護衛騎士が10人の、計16人が集まった。このメンバーで今日は行動する。
僕たち兄弟の前に、20代後半の護衛騎士が来て、話し出す。
「本日この隊をまとめます、隊長のカイル・ハーバーライトです。後ろにいる者が副隊長のフェデリック・ハントです。我々はいつでも出発できる状態ですので、皆様が大丈夫なら出発したいと思います」
「私たちも準備はできている。ハーバーライト隊長、今日はよろしく頼むよ」
クリス兄様が兄弟を代表して答えた。
樹海には馬で向かうことになった。
普段の乗馬では1人で乗っているけれど、初めての遠出になるため、僕は騎士のマイヤーと一緒

に馬に乗っている。
ロック・マイヤーは、20代半ばの騎士で、僕の馬術の先生でもある。マイヤーは気心が知れているから安心だ。
馬での移動は少し肌寒いが、気持ちがいい。初めての樹海に僕はワクワクが抑えられない状態だ。
2時間ほど走ると、樹海の入り口の手前にある駐屯地――砦に着いた。
砦は樹海の入り口に面していて、周囲を囲う土壁は3階建ての建物ぐらいの高さがある。
その土壁の厚さは5メートルほどあり、その上を人が歩けるようになっている。
騎士たちが土壁の上から監視、攻撃をするための造りだ。
また、土壁は2層あり、1層目の壁と2層目の壁の間の土地には畑が広がっている。
魔獣の氾濫などで内側にこもっても、しばらくは生活できる環境が整えられているそうだ。
2つ目の土壁の門をくぐると、騎士舎や冒険者ギルド、食堂、宿、鍛冶屋、食料品店、雑貨店など生活に必要なものが一通りあった。
ここは騎士団専用の場所ではない。樹海に行く冒険者も利用するため、村と言ってもいいぐらいの規模になっている。
樹海に近い普通の開拓村より安全かもしれない。
ちなみに樹海に入ることが可能な冒険者グループは、Cランク以上らしい。
冒険者は、最も高位のSから、最低ランクのGまでランク付けされている。

これらは、マイヤーが馬上で僕に説明してくれたのだ。
僕が周囲をキョロキョロ見ていたら騎士舎に着いた。馬はここに預け、休息後、樹海に入るようだ。
「ハルト、馬での移動は大丈夫だった？」
クリス兄様の質問に、僕は笑顔で答える。
「クリス兄様、大丈夫です。1日中、馬に乗っていたわけではないですから」
近くにいたジェラ兄様も僕に声をかける。
「ハルト、砦の中を見て回りたいだろうけれど、樹海はずっと徒歩になるから、今はしっかり休んどけよ」
「ジェラ兄様ありがとう。みんなについていけるように休むよ」
僕は兄様たちの気づかいに感謝した。
ハーバーライト隊長が僕たちの前に来る。
「クリスフォード様、ジェラルド様、リーンハルト様、1時間後に樹海に入ろうと思います。休憩は取りますが、食事は携帯食か果物のみになりますから、今のうちに騎士舎で軽食を召し上がってください」
クリス兄様がハーバーライト隊長に返事をする。
「ハーバーライト隊長、わかった。これから軽食を取るよ。1時間後の集合は、この場所でいいか？」
「はい、この場所に戻ってきてください。ハーバーライトだと長いので、カイルで構いません」
「カイル隊長、わかった。ジェラにハルト、騎士舎の食堂に行こう」
僕たち兄弟3人とジョルジュたち侍従の3人は、クリス兄様について騎士舎に向かった。

◇　◇　◇

「みんな揃っているか」
1時間後、集合場所にいるとカイル隊長から声がかかった。
そしてカイル隊長からマジックバッグが渡され、その説明を受ける。
マジックバッグは、見た目以上に物が入る、魔法のバッグだ。
今回渡された物には、時間停止機能まで付いている。
「リーンハルト様、このマジックバッグに小型ナイフ、ポーション、携帯食、そして果物と水が入っています。休憩時の水分補給は別にありますから、水は万が一はぐれてしまった時用だと思ってください。護衛にマイヤーとウィルソンがつきますので、2人と離れないようにしてください」
「カイル隊長、気をつけるよ。マイヤーにウィルソン、今日はよろしく頼むよ」
「「はっ」」
僕の言葉にマイヤーとウィルソンが、騎士らしい返事をくれた。

僕たちのやり取りを見ていたカイル隊長が、全員に向かって言う。
「ではこれから樹海に入る」

最初にくぐった門とは違う門から外に出ると、目の前には樹海が広がっていた。
木々の隙間から太陽の光が入って明るいし、道も広くて歩きやすい。なるほど、だから僕の同行が許されたのか。
30分ほど歩いていると急にカイル隊長が止まり、全体に注意を喚起する。
「前方に気配を感じる。注意を怠るな」
その言葉で騎士や兄様たちが剣を構える。
僕とジョルジュはマイヤーとウィルソンの後ろに下がる。
しばらくすると、魔獣であるシルバーウルフが5匹現れた。
「シルバーウルフはこんなに浅い場所にいる魔獣じゃないぞ……我々は大丈夫な相手ですが、リーンハルト様は動かないでくださいね」
マイヤーは驚きながらも冷静に、僕がパニックにならないように説明してくれた。
そうして始まった戦闘は、5分ほどで終わる。
クリス兄様も、ジェラ兄様もシルバーウルフを1匹ずつ倒していた。
ジェラ兄様が討伐の仕方について説明してくれる。

「ただ殺すなら瞬殺だけど、シルバーウルフの毛皮は人気があって高く売れるんだ。傷が多いと価値が下がってしまう。毛皮を傷つけないように足か頭を狙う必要があるんだ。ハルトも魔獣によって、どの部分に価値があるのか勉強しなくてはいけない。しかし、シルバーウルフがこんな浅いところにいるとは珍しい。普通なら現れるのは一角ラビットかココットなのにな」

我が家は魔獣の素材で利益を得ている。
騎士を雇うにしても、武器を買うにしてもお金はかかる。
魔石だけでなく、魔獣の素材の価値を高めて売却することも大事になるということか。
その後、ジェラ兄様から聞いたのだが、シルバーウルフは魔石と肉と毛皮が売れるようだ。
シルバーウルフの白銀の毛皮は肌触りも良く人気だが、肉は硬くて美味しくないらしい。
だからといって肉を捨てるわけではなく、加工して家畜やペットの餌にしているそうだ。
シルバーウルフは、単体だと危険度はEランクだが、だいたい5～10匹で行動するため、団体だと危険度はDランクになる。
この危険度は冒険者ランクと同じく、S～Gランクまであり、Sが最高だ。
また、さっきジェラ兄様が言っていた、一角ラビットとココットも魔獣の名前だ。
一角ラビットは、頭に角が生えた中型犬ほどの大きさのウサギで、Fランクの魔獣だ。
見た目は大きいウサギだが、とても狂暴だ。角で刺したり、体当たりをしてくるから油断はでき

ない。
一角ラビットも、魔石と肉と毛皮が売れる。
お肉は美味しく、冬は毛並みが白くなるため襟巻や手袋、髪飾りや小物のバッグなどに使用される。
春から秋は茶色の毛並みになるため毛皮の価値は下がる。
ココットは、中型犬ほどの大きさの鳥で、足が速いFランクの魔獣だ。
くちばしでつつかれると痛いし、キックされると骨折する場合もある。
名前の由来は「ココット」と鳴いているように聞こえるからだとか。
ココットは、魔石と肉と卵が売れる。
肉の味は鶏肉そのもの。前世の鶏と似ているが、鶏と違って鶏冠はない。
卵を手に入れるには雌を飼いならす必要があり、罠を仕掛けて生け捕りにするか、出会い頭に生け捕りにするかの2択だ。
雄と雌の見分け方は、しっぽを見ればわかる。しっぽが赤くなっているものが雄とのこと。
雄はすぐに殺され肉になる。
一方、雌は強いと認めた相手には攻撃しなくなるので、家畜として育てることができる。
だから各地のココット牧場には、ココットを飼いならす専任者がいる。
卵はどこでも必要だし、引退した冒険者や騎士の再就職先として人気らしい。

また5、6年すると雌は卵を産まなくなるので、生け捕り依頼は年中、我が領地でも出している。
一角ラビットとココットは樹海では弱い部類の魔獣だが、繁殖力が高く、狩っても狩ってもその数は減らない。人間にはありがたい魔獣なのである。

討伐したシルバーウルフの死体は、時間停止機能付きのマジックバッグにしまう。
水魔法を使える騎士が素早く血抜きをして、風魔法が使える騎士が血の臭いを風で飛ばす。
早くしないと血の臭いで他の魔獣が集まってくるから、素早く処理をして立ち去らないといけないらしい。
移動を再開して15分ほど歩いたところで、シルバーウルフが8匹現れる。
「いったい何が起こっているのか」
クリス兄様のつぶやきが聞こえたが、まずは目の前のシルバーウルフを倒すことが先決だ。
「リーンハルト様、今回のシルバーウルフの中に上位種が1匹います。戦闘は長くなりますので気を抜かずにいてください」
マイヤーが小声で、僕に注意するように促してきた。
「わかった。2人のそばを離れないようにする」
僕のそばにいるジョルジュも手に剣を持ち、周囲を警戒し始める。
よく見るとシルバーウルフの後ろ奥に、1匹だけ一回り大きいサイズのシルバーウルフがいる。

あれが上位種なのだろう。
戦闘が始まると、1匹、1匹とシルバーウルフが倒れていく。
最後には、上位種のシルバーウルフのみになり、睨(にら)み合う形となる。
何か、このシルバーウルフ時間稼ぎしているような……僕がそう思っているとシルバーウルフが魔法を発動させる。
「風魔法だ。より素早く攻撃してくるぞ。これは厄介だ」
マイヤーがそうつぶやいた。
マイヤーの言葉と同時に、カイル隊長が魔法で周囲の木々を操り、シルバーウルフを木の枝で捕縛しようとする。
シルバーウルフも風魔法で枝を切り刻んでいくが、それよりも速く枝がどんどんシルバーウルフに絡まっていく。
シルバーウルフはやがて動かなくなってしまった。
「ハリス、シルバーウルフの頭を魔法でぶっ放せ」
カイル隊長から指示が出た。
ハリス騎士が、アイスボールをシルバーウルフの頭めがけて連射する。
いくつかの氷の塊がシルバーウルフの頭に命中すると、シルバーウルフは動かなくなった。
「油断するな。まだ生きているかもしれない。リック、風魔法で首を落とせ」

カイル隊長から指示が飛ぶ。
上位種のシルバーウルフの首が落ちたところでみんながほっとしたように見えた。
「クリスフォード様、今日は樹海の様子がおかしいです。定期討伐をしている中腹の騎士の様子も気になります。至急、砦に戻って報告をした後、中腹に行った者たちの応援部隊を出したいと思います」
カイル隊長がクリス兄様にそう伝えた。
クリス兄様はそれに同意する。
「わかった。砦に戻ろう」
「シルバーウルフを回収して砦に戻るぞ。リーンハルト様、少し早歩きで戻ります」
カイル隊長は隊員たちに指示を出しながら、僕にも話しかけてきた。
「僕は見ていただけで、戦闘したわけではないから、大丈夫」
「わかりました。周りの警戒は怠るな。砦に戻るぞ」
みんな、急ぎ足で来た道を戻り始めた時、遠くからキャンキャンと鳴き声が聞こえてきた。
キョロキョロと周囲を見回すが、僕の周りの人たちは気づいていないようだ。
聞こえていないのか。こんなにキャンキャン鳴き声がするのに……。
僕がキョロキョロしていることに気づいたマイヤーが尋ねてくる。
「リーンハルト様、どうされましたか」

「さっきから、キャンキャン鳴き声が聞こえてくるのだけれど、みんな無視しているの？」
「鳴き声ですか。私にはまったく聞こえないのですが……」
「キャンキャンと、こんなにはっきり聞こえるのに」
僕とマイヤーの会話が聞こえたのか、カイル隊長が僕たちのそばにやってくる。
「リーンハルト様、どうされましたか？」
僕はカイル隊長に、マイヤーに話した内容を伝えた。
「どちらの方角からですか」
「たぶん、この道の奥から」
カイル隊長の質問に僕が答えると、みんなが立ち止まる。
「砦に引き返すのをやめて、少し先に進んでみましょう。何もなければ砦に引き返す形でよろしいですか？」
カイル隊長は少し考えてから僕たちにそう伝えた。
「行かなくてもいいよ。みんなは聞こえないのでしょ」
「ええ。ですが、私の直感が行った方がいいと訴えているんです。皆、急な変更で悪いが、もう少し先にある広場まで行って、何もなければ砦に戻ろう」
カイル隊長の指示にみんなが従った。

もう少しで広場に着くというところで、先頭の騎士が立ち止まり、無言でカイル隊長に合図を送る。
カイル隊長が先頭の騎士に近づいて広場の方向を見ると、驚きの表情を浮かべた。
そして、みんなに来るようにと手招きする。
マイヤーが、音を立てないように、広場が見える位置まで僕を誘導してくれる。
そこには、シルバーウルフよりもさらに一回りは大きい、真っ白い魔獣が血を流して横たわっていた。
その横に子供と思われる子犬サイズの魔獣もいる。
「あの魔獣の名前は」
僕は隣にいるマイヤーに小声で聞いた。
「フェンリルです」
マイヤーの返答に、僕は思わず叫びそうになって、慌てて口を手で塞(ふさ)いだ。
カイル隊長が隣にいたハント副隊長に小声で問いかける。
「Sランクの魔獣が何でこんな浅いところにいるのだ。樹海で何が起こっている。もしフェンリルが生きているなら危険だ。子供もいるからより狂暴になるぞ。フェデリック、フェンリルは生きていると思うか？」
「いえ、生体反応はないので死んでいるかと。他の魔獣の気配も近くにはありません」

「子供のフェンリルは生きている。気を抜かずに広場に行くぞ」
カイル隊長は子供のフェンリルに接近することを決めたようだった。
先ほどシルバーウルフと魔法で戦った、ハリス騎士とリック騎士が先頭になり、広場に進む。
子供のフェンリルが、こちらに気づき威嚇し出した。
ハリス騎士たちも応戦しようとして、魔法の呪文を唱え始める。
「待って、あの子怪我しているよ」
僕はとっさにハリス騎士たちの戦闘を止めた。
そして、マジックバッグに手を入れ、中のものを取り出すと、果物のリンーゴが出てきた。
……ポーションが欲しかったのだけど、格好がつかないからリンーゴを子フェンリルの方へ投げてみる。
すると威嚇していた子フェンリルは、リンーゴをクンクンと嗅いでから食べ始めた。
リンーゴで正解だったのかと僕は驚きながら、もう一度マジックバッグに手を伸ばすと、今度はちゃんとポーションが出てきた。
子フェンリルはリンーゴを食べ終わったようだ。
警戒が少し緩んだところで、僕は子フェンリルに話しかける。
「君の怪我を治したい。この瓶の中の液を傷口にかけたら治るから、横になってくれないか。怪我が治ったらまた果物をあげるよ」

子フェンリルは僕をじっと見つめ、ゴロンと横になった。
話が通じた。上位種の魔獣は知能が高いみたい。
このあたりは前世の異世界小説でよくある内容と同じようだ。
僕は子フェンリルに近づき、傷口にポーションをかける。
子フェンリルは傷に染みたのかキャンキャンと鳴いていたが、傷口が塞がるとすぐに立ち上がった。
「よく我慢できたね、えらいぞ。約束通り果物をあげるから待ってね」
僕は子フェンリルにそう声をかけ、マジックバッグから取り出した果物を与えた。
その様子を見ていたジェラ兄様が、興奮しながら聞いてくる。
「ハルト、何で子フェンリルと会話しているのだ」
「会話してないよ。ただ僕が一方的に話しかけているだけ。でも子フェンリルは理解しているみたい」
マイヤーとウィルソンは、その会話を聞きながら、僕とジェラ兄様を見守ってくれている。
一方、クリス兄様とカイル隊長たちは、死んでいる親フェンリルの状態を見ていた。
「これは大きな爪痕だ。いったいどんな魔獣と戦ったのだろう。子供がいたから思い切り戦えなかったかもしれないね」
クリス兄様がカイル隊長にそう言った。

カイル隊長は僕に話しかける。
「リーンハルト様。親フェンリルの遺体はここに置いておけないので、我々が回収するということ。そして、樹海の奥の元いた場所に戻ってほしいということを、子フェンリルに伝えてくれませんか？」
「えー、伝わらないでしょ。まぁ、話してみるけれど」
子フェンリルがすでに果物を食べ終わっていたため、僕は話しかけてみる。
「フェンリル君、君の親のフェンリルをこのままここに置いておくことはできないから、我々が回収していくことを許してほしい。それと、君は助かった命を大事に、これからも生きていかないといけない。親とお別れして、元いた場所にお戻りよ」
子フェンリルは親フェンリルの死体をじーっと見ていたが、急にキャンキャンと鳴きながら死体の周りを一周して、僕を見上げてきた。
「お別れできたみたいだね。じゃあ、僕たちは戻るから、君も元いた場所に帰るんだよ」
僕たちの会話を聞いていたカイル隊長が頷き、親フェンリルをマジックバッグにしまった。
「さよならだ」
僕がそう言っても、子フェンリルは動かない。その後何度か声をかけたが動かない。
仕方がないから僕たちが先に移動することにした。
僕たちが砦に向かって歩き出すと、なぜか子フェンリルもついてくる。

「えっ、ダメだよ。ついてきちゃ。君は住んでいる場所に戻らなきゃ」
僕が言い聞かせるようにそう話しても、子フェンリルはついてきた。
僕は困った顔で兄様2人の方を見る。
「子フェンリルは、ハルトと一緒にいることを選んだのではないのか。傷を治してあげたしね」
「連れていけよ。大きくなって一緒に過ごせなくなった時は、樹海に戻るように説得したらいい」
クリス兄様とジェラ兄様はそれぞれそう言ってくれた。
僕がカイル隊長を見ると、カイル隊長も頷いた。
僕は子フェンリルに声をかける。
「僕についてくると今までみたいに自由に走り回れなくなるけどいいの？　それと、親フェンリルぐらい大きくなった時はもう一緒に過ごせない。その時は樹海に戻ると約束してくれる？　それでよければ一緒にいよう」
僕が両手を差し出すと、子フェンリルは僕の腕の中に飛び込んできた。
「父様たち驚くでしょうね。飼うことを反対されるかもしれないから、兄様たちは僕の味方になってくださいね？」
僕は兄様たちにそうお願いした。
「俺もあと2年したら学園に入学する。ハルトは1人になるし、ちょうどいい遊び相手ができてよかったじゃないか」

「驚くだろうけど、大丈夫だと思うよ。この子はとても賢いしね。それと名前をつけてあげないと。子フェンリルって呼び続けるのはかわいそうだよ」
ジェラ兄様とクリス兄様は、父様たちが子フェンリルと暮らすことに反対しないと思っているようだった。
「私たちには聞こえなかったフェンリルの鳴き声が、何でリーンハルト様には、聞こえたのでしょうね」
マイヤーが不思議そうに言う。
「相性かもしれない。今は急いで砦に戻り、隊を編成して中腹にいる者たちの確認をしないといけない。親フェンリルを倒した存在を調べなければ」
カイル隊長がマイヤーの疑問に答えた後、僕たちは足早に砦に戻った。

砦に戻ると、カイル隊長は報告のため騎士舎の責任者のところへ、ハント副隊長は冒険者ギルドへ行った。
僕たち兄弟は子フェンリルを連れて、騎士舎に入って休憩を取る。
「ハルト、初めての樹海がとんでもないことになったね」
「いやー、こんな経験、俺も樹海に行っているが初めてだぞ」
クリス兄様とジェラ兄様たちが笑いながら僕にそう言った。

「樹海では聞けなかったけれど、カイル隊長の木の枝を自在に操る魔法ってすごいですね、何属性になるんですか？　あんな魔法があるなんて初めて知りました」
僕が疑問に思っていたことを聞くと、クリス兄様が答えてくれる。
カイル隊長は水魔法の使い手で、あれは植物神の加護なのだと教えてくれた。
魔法は親や一族からの遺伝になるが、加護は神様から祝福されてもらえるものだ。遺伝はしない。
加護を持つ者は1万人に1人いるかいないかだそうだ。
有名な加護だと、賢者神から与えられた鑑定、天空神から与えられた天気読みの力、海神から与えられた航海の力、植物神から与えられた成長促進の力、薬神から与えられた調合の力などがある。
カイル隊長の加護は植物神から与えられた成長促進の力だ。
成長促進は植物の成長促進に加えて、魔力量が多い者だと木の枝などを自在に操ることができるらしい。
加護判定も8歳の魔力鑑定儀式の時に行われるとのことだ。
この国には様々な神様がいる。
僕たちは、この世界を創った創造神と恵みの神の豊穣神（ほうじょう）、あとは各々（おのおの）の生活でお世話になっている神々を複数信仰している。

軽食を食べながら兄様たちと話していると、子フェンリルがもの欲しそうな顔をしているように見えた。
「食べる？」と聞くと子フェンリルはキャンと鳴いた。
ハムを挟んだサンドイッチをお皿に1つ載せて、子フェンリルの前に置くと、2口でなくなってしまった。
まだ欲しそうな顔をしているように見えたので、追加の軽食をあげた。
「お腹がすいていたのだね。僕が渡した果物以外は、しばらく食べてなかったのかな」
子フェンリルの食べているところを見ながらそうつぶやくと、クリス兄様が口を開いた。
「親があの傷で広場まで移動してきたのなら、戦った後からは、果物以外何も口にしていないのかもしれないね」
「クリス兄様、今更だけど、フェンリルに人間の食べ物をあげても大丈夫なのかな」
「美味しそうに食べているから大丈夫じゃないの。食べられなければ残すだろうしね。カイル隊長が戻ってきたら屋敷に帰るから、今のうちに体を休めておこう」

それから1時間ほど経ってやってきたカイル隊長は、クリス兄様に話しかける。
「お待たせしました。これからお屋敷に戻ります。騎士舎の前に馬を移動させましたから出発しましょう」
「中腹に送った部隊は大丈夫なのか？」

クリス兄様の疑問にカイル隊長が答える。
「戻ってくるようにと煙で合図を送ったところ、全員無事のようでした。ただ、警戒は必要なので、応援部隊を派遣して、合流して戻ってくる手はずになりました」
カイル隊長の言葉を聞いたクリス兄様は安心したようだ。僕たちに向かって声をかける。
「私たちにできることはないから屋敷に戻ろう。遅くなると父上たちが心配する」
屋敷に戻ろうとして、僕が子フェンリルと一緒に馬に近づくと、馬たちが落ち着かなくなってしまった。
人間の言葉がわかっていそうな子フェンリルに、何とかならないかと言うと、子フェンリルが馬たちに向かってキャンと鳴く。
それを聞いた馬は大人しくなった。
子フェンリルが馬に何と言ったのかは気になるが、子フェンリルにお礼を言う。
「ありがとう。これから僕が住む家に帰るよ。君も気に入ってくれるといいな」
行きと同じようにマイヤーと一緒に馬に乗るが、僕は子フェンリルを抱いている。
子フェンリルに走ってついてくるかと聞いたけれど、僕の腕の中でじっとしているので、このまま抱けということなのだろう。
屋敷に着くと、執事長のヘンリー・マクナガンと、侍女たちが出迎えてくれる。
みんな顔には出さないようにしていても、僕が抱いている子フェンリルに興味津々な様子だ。

「おかえりなさいませ。無事のお戻りで安堵いたしました。お風呂の用意はできておりますので、汗を流されたらよろしいかと」
「ヘンリー、わかった。ジェラにハルト、汗を流してから父上に報告に行こう」
クリス兄様は先に着替えてから父様に報告に行こうと提案した。
「ところで、リーンハルト様が抱いているのは、魔獣の子供でしょうか」
ヘンリーの質問にクリス兄様が答える。
「フェンリルの子供だ。ハルトに懐いて離れないのだよ。だから連れて帰ってきた」
「……フェンリルですか。わたくしから先に旦那様にご報告しておきますが、詳細は皆様から旦那様にお願いいたします」
僕は子フェンリルと、侍従のジョルジュと一緒に僕の部屋に入る。
「君も一緒にお風呂に入って奇麗にしようね」
子フェンリルに向かって話しかけていると、ジョルジュが呆れた顔をした。
僕は慌ててジョルジュに説明する。
「だって、屋敷にいることになったのだから奇麗にしないと。それに洗うと毛並みがもっと良くなると思うんだ」
「……承知しました。一緒にお入りください」

子フェンリルがちょっと嫌そうな顔をしたように見えたが、僕は気にせずに子フェンリルを抱いて浴室に向かった。
浴室から出たら、子フェンリルをジョルジュの風魔法で乾かしてもらう。
子フェンリルも気持ち良いのか大人しくしているので、大丈夫そうだ。
子フェンリルの毛並みはサラサラのフサフサになり、触っていると気持ちがよくて癒される。
僕たちの身支度が終わり、部屋を出て居間に行くと、すでにクリス兄様がいた。
「子フェンリル、毛並みが奇麗になってない？」
「わかりました？　一緒にお風呂に入って洗ったら、サラサラのフサフサになったんです。ねぇ、クリス兄様に触らせてあげてもいい？」
僕はクリス兄様の問いに答えた後、抱いている子フェンリルにお願いをした。
キャンと鳴いたので了解してくれたのだろう。
「ありがとう」
クリス兄様は子フェンリルに礼を言うと、僕から子フェンリルを受け取り、膝の上に乗せてなで始める。
「ほんとに毛並みがサラサラだね。これは癖になりそうだ」
クリス兄様は笑顔でそう言うと、子フェンリルをなで続けた。
両親とジェラ兄様が居間に入ってきた。

「この子がフェンリルの子供か」
父様が僕に聞いてきた。
僕はクリス兄様から受け取った子フェンリルを膝の上に乗せてから答える。
「そうです」
そこで、クリス兄様が、両親に子フェンリルを保護した経緯を話してくれる。
話を聞いた父様が僕の前に来て、膝を折って目線を合わせながら子フェンリルに話しかける。
「リーンハルトを気に入ってくれてありがとう。私たちは君を守ると決めたが、中には君に悪意を向けてくる者もいるだろう。もし、何者かが君に攻撃してきたら、反撃しても構わないのだが、殺さないでくれ。殺してしまうとリーンハルトとは一緒にいられなくなる。我々家族やリーンハルトが戦ってもいいと言った時は構わないがな……。約束してくれるだろうか？」
父様の言葉を聞いた子フェンリルは、僕の顔を見た後キャンと鳴いた。
「本当に我々の言葉を理解しているようだな。君を家族の一員として迎えよう。リーンハルトと仲良く過ごしてくれ。ハルト、この子を守るためにも冒険者ギルドに申請に行こう」
今度は母様が僕たちの前に来て、子フェンリルに挨拶をする。
「ハルト。お友達ができてよかったわね。わたくしはリーンハルトの母です。ハルトのことよろしくお願いしますね」
子フェンリルは母様に向かってキャンと鳴いたので、挨拶をしたのだと思う。

「本当に賢いわね。ところで奇麗な毛並みね。触らせてもらえないかしら」
子フェンリルがキャンと鳴いて了承したので、母様にフェンリルを渡す。
母様は子フェンリルを抱いて席に座ると、子フェンリルを膝に乗せた。
「なんてサラサラでフサフサしているの。気持ちいいわ。癒されるわ。時々でいいからこれからも触らせてちょうだいね」
子フェンリルにそうお願いしながらも、なでるのをやめない。
僕は子フェンリルを見ながら口を開く。
「こんなにあっさり飼うのを認めてくれると思ってなかった……」
「反対されたかったのか？」
父様が面白そうにそう問い、そのまま話を続ける。
「子フェンリルはハルトを気に入っているようだし、我々の言葉も理解しているみたいだからな。反対する理由はない。ハルト、一緒に過ごすのだから名前を決めなさい」
父様に名前を決めなさいと言われた僕は、思いつくままに候補をあげていく。
「うーん、どうしようか。ウェントゥス、アトレ、ヴェント……」
子フェンリルがキャンキャンと鳴いた。
「気に入った名前があったの？」
そう問うと、子フェンリルはキャンキャン鳴きながら、僕の目の前でくるくる回る。

行動が子犬そのものなのだけれど……。
「ウェントゥス」
……。
「アトレ」
子フェンリルがキャンキャンと鳴く。
「ヴェント」
……。
「アトレがいいの？」
子フェンリルが再びキャンキャンと鳴いた。
僕は子フェンリルを抱き上げ、視線を合わせて言う。
「今日から君はアトレね。僕はリーンハルト。改めてよろしく」
突然、僕とアトレにピカーッと光が降り注いだ。
眩(まぶ)しくて、何が起こったのかわからない。
僕が混乱している間に光は徐々に消えていった。
家族も、周りにいる執事長のヘンリーや侍女たちも呆然(ぼうぜん)としている。
いち早く正気に戻ったヘンリーが僕に声をかけてくる。
「リーンハルト様、お怪我はありませんか？　ご気分が悪くなったりとなどは……」

「ヘンリー、大丈夫。何ともないよ。今の何だったのかな？」
僕の疑問に、考え込んでいた父様が答えてくれる。
「ハルト……、書物で読んだだけだからはっきりとは言えないが、アトレと従魔契約をしたのではないか」
僕は膝の上にいるアトレに向かって聞いてみる。
「父様が言っていることって本当？」
『そうだよ』
男の子の声が僕の頭に響く。
「アトレが……今喋ったぁー」
「「「えー!?」」」
家族みんなは大騒ぎである。
「ハルト、本当にアトレが喋ったのか」
父様が僕に確認してくるがそれを一度スルーして、僕は膝にいるアトレに質問をする。
「アトレ、僕と従魔契約したの？」
『そうだよ。ハルトの魔力は多くて、とても気持ちがいい。だから一緒にいたいって思った。あとボクの傷も治してくれたし、何よりハルトと会話したかったから』
どうやら周りには、アトレがキャンキャンと鳴いているようにしか聞こえないらしい。

会話は従魔契約をした僕とだけできるみたいだ。
だから、僕はアトレの言葉をみんなに伝えた。
父様が口を開く。
「ハルトの魔力か。8歳の儀式が終わるまで魔法は使えないが、Sランクのフェンリルが気に入るということは、魔力量が思っていた以上に多いのかもしれない。従魔契約をしたら、魔獣と意思疎通ができるものなのか？」
アトレの話によると、上位種――SランクやAランクの魔獣なら従魔契約をすれば意思疎通は可能らしい。
ただし、魔獣が従魔契約をしたいと心から思わない限り、契約はできないそうだ。
アトレから聞いた話をみんなに伝えると、父様と兄様たちが残念そうな顔をした。
わかるよ、相棒……欲しいよね、うん。

第3話　冒険者ギルドとウエストランド商会

翌日。
「ハルト様、朝ですよ。起きてください」

今日もジョルジュが僕を起こしに来たようだ。
「まだ寝たい……あと5分」
僕はジョルジュの方に体を向け、目を閉じた状態でお願いした。
「はぁー。アトレ様、ハルト様を起こしてください。お願いします」
ジョルジュの言葉で、アトレは僕のベッドから立ち上がると、僕の顔に乗った。
息ができない。
慌ててアトレを顔から剥がしながら起き上がり、僕はジョルジュに文句を言う。
「アトレを使うなんて卑怯だぞ」
「アトレ様を使ったのはハルト様の方が先ですよ。私が布団を剥がすのを躊躇するように、アトレ様と一緒にベッドで寝たのでしょう」
ギクッ、何でばれているの。
「違うよ、アトレと一緒だと温かいからだよ」
ジョルジュは僕の言葉を無視して、ベッドのアトレに話しかける。
「アトレ様、ご協力ありがとうございます。お手数ですが、これからも、毎日ご協力をお願いいたします」
ジョルジュの言葉に僕はむくれていた。
「ハルト様も目覚められたようですし、早く身支度をしましょう。朝食に遅れます」

ジョルジュは何食わぬ顔で僕をせかしてくる。
僕の侍従、何だかたくましくなってない？
準備を終えた僕たちは父様の書斎に来ていた。
「ハルト、アトレ、準備はできているか」
「父様、いつでも出かけられます」
『ボクも大丈夫』
僕もアトレも父様に返事をする。
アトレの声は父様には聞こえていないのだけれど……。
僕たちはこれから、アトレの従魔申請のため、冒険者ギルドへ行く。
父様、アトレ、ジョルジュ、そして護衛のマイヤーも一緒だ。
2日続けて外出するなんて、この世界に生まれてから初めてだよー。

◇　◇　◇

馬車に揺られて20分ほどで僕たちは冒険者ギルドに着いた。
3階建てのレンガ造りで、がっしりとした建物だった。
冒険者ギルドのドアを同行の騎士が開けると、父様を先頭にして中に入る。

ザワザワしていた冒険者ギルドの室内がシーンとなって、冒険者たちが僕たちに道をあけてくれた。
さすがは父様、オーラがあるよ。かっこいいな。
「ご領主様、お久しぶりでございます。お持ちしておりました。ご案内いたしますので、こちらへどうぞ」
飄々(ひょうひょう)とした、癖のありそうな男性が、いつの間にかそばにいて声をかけてきた。
この人の気配がまったくわからなかったぞ。
父様が男性に話しかける。
「マックベリー、相変わらず気配がないな。もう少しわかるように近づいてくれと言っているだろ」
「これでもわかると思ったのですがね。忙しすぎてご領主様は、鍛錬をさぼってらっしゃるのでは？」
「憎まれ口を叩きよって。まあ良い。話がしたいから部屋に行こう」
マックベリーと呼ばれた男性は、父様とは親しいようだ。

案内された応接室には、マックベリーと呼ばれた男性の他に、男女1名ずつがいた。
その3人が僕の対面のソファーに座っている。

父様と僕もソファーに座っていて、アトレは僕の膝の上にいる。
ジョルジュ、マイヤーが僕たちのソファーの後ろに立った。
マックベリーさんが、テーブルに小箱を置く。
それを開けると魔導具が発動した。
そして、僕たちに話し出す。
「これでここは外部と遮断(しゃだん)されました。こちらの2名は信用できる職員です。内容次第では、外部の者に話せないように魔法契約を結ぶ準備もしています」
魔法契約を結ぶと、魔法で強制され、契約内容に違反できないようになる。
それに父様が答える。
「至急会いたいと連絡しただけで、用意周到なのはさすがだな。隣にいるのが三男のリーンハルトだ。リーンハルト、マックベリーは冒険者ギルド長だ」
父様が僕を紹介すると、マックベリーさんも自分たちの紹介を始める。
「ではこちらも自己紹介を。ウエストランドの冒険者ギルド長をしているマックベリー・ウィンストンです。そして副ギルド長のキャビン、受付統括のメビウスです」
ギルド長って厳(いか)つくて筋骨隆々な人をイメージしていたから、普通の人に見えるのは意外だった。
でも敵に回ると厄介そうな人物にも見える。
僕がギルド長の顔を見て考え込んでいると、父様がまた話し出す。

「時間がないのでさっそく用件に入る。息子の膝の上にいるのはフェンリルの子供だ。息子を気に入ったらしく、息子と従魔契約をしたようだ。だから従魔申請に来たのだ」
父様の言葉に冒険者ギルドの職員さんたちは、驚いた様子で一斉にアトレを見る。
「はっ、フェンリルだと。冗談……ではないな。フェンリルから魔力の圧を感じる。やめてくれ。昔に高ランクの冒険者が魔獣と従魔契約をした記録は残っているが、最近はまったく聞いたことがない。そのうえ希少なフェンリルと従魔契約をしたことが広まったら、大変なことになるぞ。面倒な奴らが寄ってくるだろう」
冒険者ギルド長のマックベリーさんは、顔を引きつらせながらそう言った。
驚きのせいか丁寧な話し方が崩れている。
「リーンハルトはまだ7歳だ。フェンリルと契約したことをいつまで隠せるかはわからないが、できるだけ長く隠したい。だから協力してくれ」
「とんでもない案件を持ち込んできたな。はぁー。……フェンリルには不本意かもしれないが、シルバーウルフの子供として登録するのはどうか。それでも話題にはなるだろうが、シルバーウルフの子供を助けて懐かれたということにした方が周りは納得しそうだ」
マックベリーさんの提案を受けて、父様はアトレに話しかける。
「アトレには不本意かもしれないが、ハルトとアトレを守るためでもある。ハルトが自分自身を守れる力をつけるまで、シルバーウルフの子供で世間には通させてくれないか」

アトレは僕を見て、しょうがないなって顔をしてから、『わかった』と返事をしてくれた。
僕が父様にアトレの言葉を伝えると、驚きを隠せないマックベリーさんが尋ねてくる。
「フェンリルは俺たちの言葉を理解しているのか？」
「アトレは我々の言葉を理解しているし、ハルトとは会話しているよ」
父様がマックベリーさんの質問に答えると、ギルド職員の3人が大きな声を上げた。
「「えーー」」
マックベリーさんは、僕とアトレを交互に見て、天を仰ぎ、ため息をつく。
「これは魔法契約が必要だな。使うとは思わなかったけど、用意して正解だった」
マックベリーさんはしみじみとそう言った。
何か大事(おおごと)みたいにしてしまって、ごめんなさい。
「ハルト、冒険者ギルドに用がある時は、この3人に相談しなさい。しばらくはないとは思うが念のためだ」
父様の言葉で、僕はマックベリーさんたちに向かって軽く頭を下げた。
貴族は深々と頭を下げてはいけないからね。
「よろしくお願いします」
僕の言葉を受けてマックベリーさんは、父様と僕に向かって言う。
「じゃあ、これから従魔申請の手続きを済ましてしまおう」

僕がサインした書類をマックベリーさんが受け取り、確認する。その後、副ギルド長のキャビンさんに書類を渡した。
「これで必要書類の記入は終わった。最後にリーンハルト様、従魔のネームプレートを作ってアトレの首にかけてほしい。本来は冒険者ギルドが用意するべきだろうが、生憎ここにはないので、申し訳ないがそちらで用意してもらいたい」
マックベリーさんが、僕たちにお願いしてきた。
アトレが大きくなった時のことを考えて、付与魔法に属するサイズ調整の魔法が付与されたネームプレートがいいだろうとも教えてくれた。
「マックベリーさん、ネームプレートには何を書いたらいいですか？」
「アトレの名前と所有者の名前は最低限必要だ。それだけでもいいし、あとは任せるよ」
僕たちはお礼を言って冒険者ギルドをあとにした。

◇　◇　◇

馬車が屋敷とは違う方向に進んでいるので、僕は父様に尋ねる。
「アトレのネームプレートの話があっただろう。せっかくだから依頼してから帰ろう」
馬車は上品な宝石店の前で止まった。このお店らしい。

てっきり鍛冶屋に行くのかと思ったのに違ったみたい。
お店から経営者らしき人が飛び出してきて、馬車から降りた父様に挨拶をしてくる。
「これはご領主様、ようこそお越しくださいました。お呼びいただければお屋敷まで伺いましたが、何か不都合がありましたでしょうか」
「いや、近くに用があってな。ジェームズ、連絡なしで来てしまってすまなかったな」
父様の言葉にジェームズさんが慌てて返す。
「とんでもございません。いつでもお気軽にお越しくださいませ」
「それならよかった。確かここは動物のネームプレートを扱っていなかったか？」
「はい、ペット用のネームプレートを取り扱っております。オーダーメイドも承っております。……立ち話をして申し訳ありません。どうぞ店内にお入りください」
ジェームズさんが、店の応接室に案内してくれた。
女性がお茶を出してくれたので飲んでいると、ジェームズさんと従業員が、ネームプレートの見本冊子とネームプレートを通すネックレスの見本を、いくつか抱えてきた。
ジェームズさんが、僕たちの向かいのソファーに座ったところで、父様が僕の紹介を始める。
「私の息子でリーンハルトだ。息子の膝にいるアトレのネームプレートが欲しくてな。ハルト、デザインはお前が決めなさい」
「そうでございましたか。リーンハルト様、こちらが見本です。気に入るものがなければオーダー

メイドも可能です」
ジェームズさんが僕に見本の冊子を渡してくれたので、中を見ていく。
僕が見本を見ている間、ジェームズさんは父様と話す。
「毛並みがとても奇麗な子犬ですね。さすがはウエストランド家で飼われる子犬は違いますな」
「いや、実はシルバーウルフの子供なのだ。息子が樹海で怪我をしているこの子を助けたら、気に入られて屋敷までついてきてしまったのだ。それで飼うことになって、冒険者ギルドで従魔申請した帰りなのだよ」
「シルバーウルフの子供ですか。大人しくて魔獣だとは、まったく気づきませんでした」
ジェームズさんはアトレを見ながら、「最初に聞かされていたら、大騒ぎをしてしまったでしょう。さらに従魔申請なんておとぎ話の世界だと思っていました」と口にした。
ジェームズさんは言葉を継ぐ。
「しばらくは領都の話題を独占しますね。でもこの話題で我が店も注目されそうですから、ありがたい話です」
ジェームズさんの言葉に父様が首をかしげる。
「そうなのか？」
「はい、嬉しい話ですよ。きっとペットのネームプレートが流行ります。ああ、お値段は高くなりますが、シルバーウルフのプレートは、折れにくいミスリルを混ぜた板がいいでしょう。ネックレスも同じもので作ってはどうでしょうか？」
ジェームズさんの提案に、父様はしばらく考えてから返事をする。
「そうしてくれ。あとプレートとネックレスにサイズ調整の魔法を付与してほしい」
ジェームズさんはアトレがただのシルバーウルフではないと感づいたようだが、気づかないふりをして、僕に気に入ったものがあったか話しかけてきた。
ジェームズさんは結構やり手なようだ。
僕は父様の方に顔を向けて尋ねる。
「素敵なデザインで目移りしますが、父様、我が家の紋章を入れてもいいですか？」
「我が家の紋章か。別に構わないが」
「だって一目で我が家のアトレってわかるでしょう？」
僕たちの会話にジェームズさんも入ってくる。
「なるほど、それはいい案ですね。この領都でウエストランド家の家紋を、知らない民はいませんから」
ジェームズさんからいい案だと言われたため、父様は前向きな様子だ。
「それなら表面に我が家の紋章、裏面にアトレの名前と所有者であるハルトの名前を刻んでもらうか」
「あとすごく小さくていいから、アトレと僕の目の色の宝石を埋め込んでほしいんです」

立ち読みサンプル
はここまで